



公演・コンサート

スポーツ

教室・講座

健康

生涯学習

その他イベント

HOME > 地域人 > 木漆工芸家 菅沼 三千子さん



港区内で活躍している人をご紹介します！

▶▶ バックナンバー

木漆工芸家

すがぬま みちこ
菅沼 三千子さん

独自の技法で漆器ジャパンの魅力を発信



両手の指をスッと伸ばし茶色に染まった爪を見せながら「私が何を作っているか当ててみて、と聞いて、当たったためしがないんですよ」と笑う菅沼三千子さん。「焼き物？染め物？と言う方はいますが、漆と言うとどんなに若い方でも、すごい！と驚きますね」。40年以上、漆器を作ってきた技と経験に染まった爪なのでした。

女子美（※）時代から、独自に木工や鎌倉彫を学んでいた菅沼さんは、卒業後、神奈川県・鎌倉市・伝統鎌倉彫事業協同組合の三者が作った職業訓練校の一期生に。まだ女性職人がほとんどいなかった時代でしたが、鎌倉彫・寸松堂の工房を経て、自分の作品を作るため独立。赤坂で毎年個展を続けながら、和賀江塗（わかえぬり）と命名した独特の技法を編み出しました。 ※女子美術大学短期大学部

1984年にはオーストラリア・メルボルンのナショナル・ギャラリー・オブ・ビクトリア（NGV）に作品が収蔵され、海外からも注目される工芸作家として活躍してきました。オーストラリア大使館に寄贈する漆器として、港区に買い上げられた作品もあります。

「輪島塗などに代表される絢爛豪華で雅な魅力と、鎌倉彫に代表される、質実剛健で堅牢な普段使いもできる魅力。その二つを融合し“美しく丈夫”をモットーに作ってきました」。そのため、お正月だけ使うのではなく、普段の生活でももっと漆器を使ってほしいと考えているそうです。

「漆器は元来が木ですから、保温保冷に優れ、扱いも難しくありません。水滴が残らないし、汚れもサッと拭けば大丈夫。瀬戸物のお茶碗に盛るとすぐ冷めてしまうごはんも、漆椀なら30分たっても温かい。良い塗りの器なら、1週間水につけていても剥がれないし、割れても元通りに直せます」。

17年前に、高輪に住む妹さんの縁で、湘南から港区・三田に移り住み、港区で作品を作り続けています。70代になって、こうした漆器の魅力をもっと多くの方に知ってもらいたいと、漆器を作るワークショップを開催。今後は、若い世代にも浸透するように、漆のアクセサリー（バングル）作りなども企画しています。

「漆器は日本の伝統工芸で、日本の生活に適した器です。そうした魅力を港区からもっと発信していきたいですね」。

▲このページのトップへ

| サイトマップ | みなさんの声 | Kissポート財団について | 情報誌「Kissポート」について | 品質・環境への取り組み | 個人情報保護について[PDF] |



(公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団)

港区赤坂4-18-13赤坂コミュニティぷらざ

電話：03-5770-6837/Fax：03-5770-6884 お問い合わせ：fureai-info@kissport.or.jp

ISO 9001
ISO 14001JQA-CMA12663
JQA-0844505

10861140(04)